

経済学認識対象論

岩 崎 秀 二

1. ま え が き

一般的に云って、理論的科学は、その科学の対象を設定し、その対象についての法則を定立し、その法則に基づいて理論構成を行い、更に理論を体系として樹立することを認識目的としていると云える。このことは理論経済学についても亦妥当する。従って理論経済学が理論の樹立という認識目的を追及するためには先ずその第一歩として経済学の認識対象論について考究しなければならない。本稿はこの点に関して、認識対象論の必然性、認識対象構成論、概念構成論につき若干の考察を行おうとするものである。

2. 経済学認識対象論の必然性

他の科学と同様に経済学の最初の問題は、何を認識対象とするかにある。何故なら科学の問題、従って認識は我々が何について、如何なるものとして、如何ようにして知るかということであり、換言すれば理論従って認識の問題は、認識の対象を求めることと対象の認識を究めることにあり、このことは論理上先ず「何について」の問題の確立、すなわち認識の対象の規定を要請しているからである。そしてこの問題の解決は、ある意味で科学の性格の決定を意味する。すなわちその科学が何を研究すべきかが確立されるならば、その学問の任務全般が予定されることになる。何故なら、対象は、認識主体が対象に働きかける際の手続、すなわち方法に関する最も重要な事柄を制約しており、従って科学の体系そのものをも予定

しているからである。

我々はここで存在ならびに事物の本質的性質，すなわち対象自体の理説たる本来の認識論について述べようとするのではない。一特殊科学たる経済学に関する認識の範囲内でこれを論じようとするのである。一般に特殊科学の対象規定は左程容易ではない。何故なら特定範疇を選んでその科学の対象を他の科学から区別して限界性を引いたとき，理論的には明確に境界線を画したとしても，この限界線上に横たわる多数の事例が発見されるからである。このことは経済学についても亦妥当する。特定の一現象が絶対的意味において経済的現象としてのみ存立しているということとはあり得ず，一つの現象は *als solches* には，如何なるものとしてでも意識にのぼせ得る素質をもっており，各個の現象はそれ自体，多様な属性をもって顕現しているといえるのである。多様な混沌たる多数の現象から経済学の対象を設定するに当って，客観的に妥当な原理を求め，それによって規定した経済現象のうちに，所属不明の要素がないように，従ってまた経済的要素を含む現象を脱落しないためには如何にすべきかが追求されなければならない。それ故経済学に固有の認識領域を指示するためにはどうしても経済学対象論を反省してみなければなるまい。

しかし，その対象は資本主義経済であると規定したとしても必ずしも確定されない。アルフレッド・アモンはその著 *Objekt und Grundbegriff der theoretischen Nationalökonomie* において古典学派，歴史学派，限界効用学派及びその他の方法論的文献に現われている対象規定の実情を紹介し，批判し，この問題の未解決状態を指摘しているが，これは今日においてもなお妥当性を失っていない。その他やや古い人であるが二三の例をあげてみよう。

ローザ・ルクセンブルクは「国民経済学は奇妙な学問である。この領域に第一歩を踏み入れるに当って，この学問の特有の対象が何であるかという最も基本的な問題について，早くも難点と意見の相異とが始まる。信じら

れない話であるが、国民経済学の専門家の大多数が、自らの学問の真の対象が何であるかについて、きわめて曖昧な概念をもっているのは事実である¹⁾と述べている。

ウェルナー・ゾンバルトは次のような嘆声を発している。「古来ドイツ国民が Nationalökonomie と呼ぶところの科学においては、規定されているべきことがすべて規定されていない。それが取り扱うところの対象さえ規定されていない。そして斯学が何処に自らが存在するかを知らないということが、他のすべての『科学』と共通にもたないところの、ただ哲学のみが斯学と共通にもつところの一つの特性である。何故なれば、私の見る限りにおいては、すべての他の科学は、過去において確かに烈しく論争されたにしても、現在では自己の地位を知っているからである。もちろん最も論争の的となっている二三の科学、たとえば論理学または心理学乃至は地理学の問題提起・方法・認識様式に関しては極めて大なる見解の相違がある。それにしても論理学が人間の行為ではなく人間の思惟を、心理学が人体の構造ではなくて人間の心理的生活を、地理学が月ではなくて地球をその研究対象としてもっていることについては何人もこれを疑わない。しかるに経済においては、事実上かかる境界づけは存しない。我々は、研究が地球に関するのか月に関するのかを知らない。」²⁾

ゾンバルトは「経済」なる語の意味が不明確なために「経済学の対象は経済である」ということが、何らの解決をも意味しないことを指摘した上で次のように述べている。

「形式的規定性においては、経済なる語は、一定の人間の行為、人間の行動の一定の種類、『経済すること』を表示し、またそれより導き出されて、人間の行為のこの一定の種類に対応するところの状態を表示する。しかも正また負の価値記号をくっつけて。……かくして『経済的なものは主体の・その意欲の客体に対する・関係を意味するものであることが明白となる。このことから我々は、経済的現象の特性を、主体の・その欲

求の客体に対する・関係に負っているような現象であると看做されなければならない。ということとなる』。またリーフマンは経済学は『客体ではなしに、心理的計慮を取り扱うべきである』といている。この行為すなわち『経済すること』は、かくて二重の観点のもとに規定され得る。そしてこれは経済学について二つの異なる様式をもたらしした。すなわち

「第一には、我々は、人間の行為に対して一つの準則の尺度をあてる。すなわち、それを合理主義的に評価し得る。かくして例えば、経済することは『経済原則』に則って行為することを意味するといひ、またこの原則に従って形成された状態を表示するためにも経済という。かくしてこの際には、経済または経済することは所与の目的に対する『正しき』手段の選択を意味する。

「第二に、経済することを、一つの特定の利益に役立つところの、換言すれば最も大なる利用効果にさし向けられた行為と解し得る。この際『利用』をもって享樂と否『幸福』とさえも同一視する。かくて経済なる語は、ここでは心理学的な、また一層正確に云えば、感覺論的な刻印を打たれる。〔リーフマンはいう〕『人間の経済的行為と経済的關係および人間がそのために作った制度と施設等の根底に横たわる統一的なもの、すなわち経済科学の同一原理は物財の調達にあるのではなく、最大の効用剰余・享樂を目的として純粹に心理的に考えられた効用と費用との対置と比較に基づく特殊の計慮の内にあるものである』と。

「Wirtschaft についての形式的見解の二つの亜種は、合理的なものも感覺的なものも、ともに経済学をして一つの綜合科学 *Universalewissenschaft* にならしめる必然性をもっていることを知る。何故なら『経済原則に則って行為せよ』および『効用原則に従え』という二つの原理は、人間の全く普遍的な行動様式を表示しているからである。画家も詩人も哲学者も『経済原則』に従って行為している。否一切の『理性的人間は、すべての瞬間において然りである。常に人々の頭に次の根本原則が浮んでいる。

『欲する目的を実現するために、必要とするところよりも大なる如何なる費用をも出すなかれ』。

「我々は、全く形式的に立てられた『経済学』を一つの *Quid pro quo* 一つの誤解と看做すべきである。彼等は簡単に『経済』なる語の二重の意義の犠牲になってしまっているのである。この語は一度は正当にも経済をもって事物的領域を意味しながら、さらにそれとは全く別なもの、すなわち『経済性』をも意味している。〔効用原則の代表者たちが〕まさに経済なる語のこの誤った意味を掴んだことは、彼等の災難であった。『経済性』なる概念をもってしては、たとえば一つの科学の境界を画するといったようなことが不可能であるということは明白なはずである。³⁾

さらにまた「シュタムラーは社会生活と経済生活とを同一視することを提案している。『もし経済学が一個の独立的な科学たろうと欲するならば、その研究の対象として外部的に規制された共働 (*das ausserlich geregelte Zusammenwirken*) をもってするときのみ、このことが可能である』経済学に端緒と基本概念を交付するのは『人間の社会的な生活であり、この社会的な生活の特殊な論述と具体的な実現が経済学によって固有の任務として研究さるべきものである。』と。私は経済学の対象をかくの如く一般的に規定することは、合目的々であるとは信じない。教会における・家庭における・裁判廷における丸柱戯クラブにおける・取引所における・および工場における諸多の現象を研究することを同じ一つの科学の任務となさないためには、我々は確かにこの『外部的に規制された共働』のうちに、なお特別な区画をつけなければならない。視野をこのように拡大した場合には経済学が正にあるべき何等か一つの特殊科学には達し得ないでむしろ一個の普遍的な社会学に達してしまうであろう。⁴⁾

「シュパンは経済を定義して『目標に対する諸手段の総計』であるとなした。彼はこの概念規定に引かれて最も遠隔な領域までも経済学研究の領域に引き入れることを余儀なくされた。何故なら時あってか『手段』とな

り得ないようなものは存しないからである。しかしその性質上ただ手段でしかあり得ないところのもの（これを彼は『純粹』手段と呼ぶ）もまた異質的な性質をもっていて、一つの科学によって包括され得ない。かくて例えば総ての政策、総ての教育が、経済学の研究領域に所属することになる。シュパンの概念規定は、単に我々が『手段』なる概念を物財に制限するときのみ採用し得る。がそれでは彼の概念規定の要点が駄目になってしまう。なお『純粹手段』なる概念は一つの不正当な、形而上学的意味を含んでいる。何故に経済は単に手段であって、文化目的であり得ないか、何故に経済のみが手段であって国家もまた手段であり得ないか。

ともあれシュパンの愛すべき見解は、今一つの見地から見ると『経済』なる概念の決定に当って、自ら意識せずに物質的表徴と形式的表徴との間に彷徨している多くの理論家の典型となっている。シュパンは当初最も客観的な立脚点を採っているにもかかわらず、叙述の経過において『経済』なる概念が不知不識のうちに『経済性』の概念に変化してゆき、かくして突然我々は、経済の対立物が非経済性であることを知らされるのである。

『経済は非経済（＝非経済性）に対立する一つの類概念である』と。しかし『非経済性』なる概念は、従ってその対立物なる『経済性』従って『経済』は『社会』と一体何の関係があるのかと問わねばならない⁵⁾。

それならゾンバルト自身は経済学の対象たる経済を如何に考えているか。

「かの経済性についての学問と並んで我々が『ドイツ国民の経済』または『高度資本主義時代における経済生活』を云々するとき我々が考えている事態についての一つの科学を成育させてゆく必要性が存する。この際には、経済は物質的な意義において、人間の諸活動と諸施設の・内容的に規制された・一つの範囲として眼に映じて来るのである。この物質的見解においてのみ、経済は、一個の特殊科学の対象として、真面目にこれを問題とすることができるのである。」⁶⁾

「理論家の任務は第一に、研究さるべき事物的領域を画することである。私の信ずるところによれば、最も多く為される仕方でなすのが最もよいのである。通俗的な考え方でも一度位は正当であり得る。しかも経済学の対象について世に行われているところの規定は、自然という外界の物に対する人間の欲望とその相対的抑制との間に必然的に存在しているところの緊張に関してなされている。かくして我々は、経済を人間の生計資料への配慮として、すなわち物質的諸財の調達に対して向けられた人間の活動として了解する。⁷⁾」

以上によってゾンバルト自身の経済学対象規定の態度とその対象観の一端を知ることができよう。

これを要するに経済生活とは吾人の物質的生活または物質的福祉に関するもの・乃至は欲望充足に関するものであるとなす説、経済とは犠牲と効用・乃至は犠牲相互間の比較考量なりとなす説、経済生活とは交換生活なりとなす説、経済現象とは価格現象である、従って経済学の対象は価格経済であるとなす説等極めて多くの学説が存する。

我国における経済学者の見解も必ずしも一致していない。或いは「配分」(有機的一体をなす全体の一部としての物の支配を移転すること)を経済となす説——土方成美博士の初期の説⁸⁾——、或いは「経済行為」とは無条件有償的な獲得行為であり、かかる経済行為の総体が経済であるとなす説——高田保馬博士⁹⁾——、或いは「利用享受と費用支出との限りなき交錯の間に、最もすぐれた全体秩序をつくり出す」ところの「全体的調整作用」を経済とする説——杉村廣蔵博士¹⁰⁾——、或いは稀少資源の配分・利用・変動の理論を解明することであるとなす説——安井琢磨博士——等要するに経済学の対象が何であるかについての意見の一致は見られない。今日可なり一致の見られる見解としてはポール・サムエルソンにならって「何を」「どれだけ」「誰のために」造るかということに経済の意義を求める見解であるが、それにもかかわらず経済学の対象が何であるかについ

ては意見の一致はなく、しかもこの問題は困難にしてしかもその正しき解決が必須の問題なのである。この問題の多くの人の立案体系化の企図にもかかわらずその困難性の窮極の克服は今なおなされておらず、対象規定の暫定性、相対性は新規の対象規定の不可避性を伴う。かくして「経済学の対象は何か」という古くして新しい問題がなおかつ問われねばならないのである。

経済学の対象が不定であり、未定であるということは虚構であるともいえる。何故なら経済学が不十分ながらも一つの学として誕生して以来個々の経済学者がある特定の対象なしに仕事をしてきたというごときことはあり得ず、また個々の学者が孤立して活動してきたと断定することは事実合わない。科学の労作の上には協働継承があって、その仕事の対象が次第に確定して来たのであって、事実としては、斯学が全く不定であったというごときことはあり得ない。それ故我々の不完全な言葉で端的に表現することが不可能であるにせよ、とにかく何らかの特定の対象を取り扱っていることを認めざるを得ない。科学構成の実践においてその対象とするところのものを改めて規定することに興味を有しないか、規定しているにしてもそれが曖昧であるか、何らかの原因でそれが実際の対象と一致していないかであるに過ぎないともいえよう。それ故にこそ我々は対象論の必要を説かざるを得ないのである。否経済学認識論の存立の理由がまさにそこにあるといえよう。それは科学の実践的労作に対する反省にほかならず、また科学者の科学的問題の自覚的再提起である。科学者の現実になしたところが反省的にみて不確実であり、不正当であり、不十分であるところに認識論が要請されるのである。経済学の対象が確定していないために、ここに認識論一般の援けを藉りて、経済学的認識の本質とその権限とその限界について証明根拠を与える経済学認識論の一部として経済学対象論を構成しなければならない。経済学はその対象が客観的普遍妥当的に確定してはじめてその認識目的の目的物を見出し、また合理的な方法をもってこれを

操作してゆくことができるからである。

- 注 1) Rosa Luxemburg, Einführung in die Nationalökonomie, 1925, S. 1.
 2) Werner Sombart, Dre Nationalökonomien, 1930. S. 1.
 3) a. a. o., SS. 2-5.
 4) a. a. o., S. 6.
 5) a. a. o., S. 7.
 6) a. a. o., S. 5.
 7) a. a. o., SS. 5-6.
 8) 土方成美「経済学総論」昭和3年第1章第3節。
 9) 高田保馬「経済学新講」第1巻, 昭和4年, 1—4ページ。
 10) 杉村廣蔵「経済哲学通論」昭和13年, 112ページ。

3. 経済学対象構成論

認識の対象が如何に構成されるかという問題は多くの哲学説を仔細に検討批判して始めて出来ることであるが, 経済学徒にとっては必ずしもそれを要請されるとは云えない。それ故ここでは認識とは「宇宙の測り知れない豊富さから, 対象の独特の世界を, 人間の意識において生産するところの選択的綜合¹⁾」であると解し, 認識の対象は与えられたままの現実態すなわち単なる主観的体験から, 客観的な手順によって, 科学的作業の資料として, いわば科学的な経験として抽出されたものであるとして, ここに, この抽象作業あるいは選択的綜合を如何に行うかということを第一に取り上げることにしよう。

もちろんここで問題とするのは単なる知的活動, 前科学的な素朴な認識活動ではなく, 科学的認識である。従って認識が普遍妥当な基礎の上になさるべきことは当然である。認識がその対象を獲得する普遍妥当な過程は内包的にも外延的にも多様な, 全体的にも部分的にも見透し得ざるような豊富な, しかし混沌とした経験対象たる現実態に対して対象論的範疇をもって働きかけ, それから当該科学の内容・質料つまり認識対象を引き出してくることにある。そして対象構成における唯一の拠りどころたる対象論的

範疇は、認識目的そのものを母胎として形成される。以下このような原理が科学の対象構成について容認されるものとして議論を進めてゆこう。

さて科学の「対象論的範疇」とは何か。ここでは簡単にあらゆる科学の対象論的範疇とは、我々が認識者として、客観的に当該科学の対象たるべき資格ありと一般に考えているところのものに例外なしに含まれているところの・かつこれなしには当該現象を当該科学の対象として取り上げ得ないごとき、しかもこれあるがゆえに他の科学の対象と当該科学の対象とを区別し得るところの契機・表徴・または本質的要素であると考えておこう。それぞれの科学の対象は、概念的には、かかる契機を中軸として他の諸要素が結果することによって始めて成立するのであり、何れの科学においても、その個別的な対象について、かかる契機を求めることが可能である。何故なら、これらの諸々の対象は、当該科学の対象として、経験対象たる客観的現実態から選択されて、そこに概念的に成立している限り、すべてに共通するある要素を、またこれあるがために他の科学の対象たるべきものから自身を区別している要素を当然に含んでいるからである。

かかる契機・表徴または本質的要素の把握は如何にして可能か。これは難問であるがこれには二つの途があると考えられる。一つは当該科学の各個の対象を出発点として、それらのすべてに共通なある要素を探し求める、いわば帰納的手続である。二は、当該科学における契機を直感的に自得する途である。この二つは決して矛盾するものではない。鋭敏なる直感力をもつ人は、対象を始めから極めて適確に把握するであろうし、しかも直覚的に自得したところと、帰納的に知り得るところとは一致するであろう。多くの人を対象についての何らかの表徴を感じとってはいるにせよ、それが十全な表徴であるか否かについての十分な確信を得ず、かかる表徴を暫定的なものとして持ち、その日常生活における体験に鑑み、また科学的帰納を通じてそれを確実にし、または修正を加えて始めて真実の対象を把握し得るのである。我々は以上の二つの途を相互補完的にとり、ことに

第一の途に多く依存し、経験的集積の進行および科学における労作の進展とを通じて反省の資料を豊富にし、それぞれの科学における対象論的範疇を確立してゆくことができるのである。

以上のことは一般に科学における対象構成について認識論者の概して一致しているところであるといつてよい。もちろんそこには多くの難問が潜んでいようが、それらの窮極的な解決は哲学者に譲り、我国における認識対象構成論の一つの先例として左右田喜一郎博士の概念構成論を省みてみよう。

注 1) W. Windelband, Einleitung in die Philosophie, 1914. S. 236.

4. 左右田哲学における概念構成論

経済学の科学としての成立の第一歩はあらゆる科学と同様に現実態そのものでも、また単なる主観的体験でもなく、観察材料としての経験対象たる経験内容一般の見透し難き多様性について、それを経済学の対象論的範疇によって経済学に適応するもののみを抽出し普遍妥当な基礎の上に消化総合し解釈することによって得られるものである。経済学の作業はここから始まる。それは経済学の概念構成、対象構成に外ならない。そこで経済学の対象が如何にして構成されるかについて本節では左右田博士の先駆的学説を省みてみよう。

対象構成については経済学の発展史上多くの巨匠があるが特に左右田博士をとりあげる理由は経済哲学ひいては経済学方法論建設の意義、斯学の課題、その解決方法などについての理論的考究は博士によって始めて為されたのであり、今なお敬聴に値するものがあると共に、これに対して修正補充をほどこす可き諸点もあると考えられるからである。今日においても経済学の課題や方法についての考察を問題とする場合には『経済哲学の諸問題』にあらわれた博士の見解の考察批判をて通し何らかの意見を形造ら

ざるを得ない。それ故経済学認識論における世界の学界の貴重なる共有財産たる博士の学説を省みることが今尙十分の意義をもつものと思うのである。

博士にあっては従来の有力なる学説（オートリー学派）の態度を批判し、その欠陥を指摘することから始めて新カント学派の立場において経済学の概念構成を基礎づけることにおいて完成する。博士の所説をあとづけよう。

「現今経済学の出発点をなすものは『欲望』（Bedürfnis）の概念である。併し乍ら欲望の概念は人間行為一般と関連せる広汎なる概念であるから、それを『経済的』として定義し得んがためには他の制約的要素を附加することを要する。之が為一方に於ては『有形財』（konkrete Güter）他方に於ては『有価』（Entgelt）という事が考えられ、斯くて欲望の概念より経済行為の概念が獲られ、例えば次の如く定義せらる。『経済行為とは一箇の、若くは多数の他の財を使用（譲渡、或は道具の場合には消耗）して欲望充足に必要な占有し得る外界財を有償的に獲得する事に外ならず』と。……斯くて経済行為は他の人間行為に対し其の限界を画され、茲に経済的存在が他の現象より区別せらるる根本的本質の相違が見らるるのである¹⁾」あるいはまた経済行為を規定するに、ここにあげたような諸契機に加うるに、「経済原則」に則るといふことをもたらすものもある²⁾。さらに「生計手段の獲得に直接的関係を有する」といふことを以て「経済的」となさんとするものもある³⁾。之を要するに、通説は「経済学の出発点を欲望に求め、之より其対象たる物一般を得、其の内より経済学上の財を導き、之に関連せしめて経済行為の概念を定め、進んで之より経済の意義を決し、更に経済組織の完成したるものとして国民経済を拉し来りて吾が経済学の対象を定め得べしとしている」⁴⁾のである。

ところが「斯かる思惟方法の必然遭遇せざるを得ない大なる困難が直ちに現出するのである。其の一は「第一の説のごとく、欲望充足のための

財をもって来て〕経済財の範囲を余りに広く包括せんと欲するとき、最早此の対象に対する人間の充足行為を『経済的』という特殊の表徴の下に解するを得ない。何となれば、余りに異なる要素が介入することに依って明白なる科学的意義が失われざるを得ないからである。第二に……単に有形財のみを経済学の対象たらしめんとするとき、而して斯学に於て斯かる有形財に向けられたる人間の欲望にのみ或る意味を附与せんとするとき、是れ既に当初より『経済的』なる概念を予想するのでなければならない。是に於てか、常に残る而も根本的な問題は、何故に多くの欲望より単にかくの如き欲望のみを『経済的』と定義せざるべからざるか、ということこれである。此の事は、殊に従来純経済的と称し来った行為には他の種々なる人間行為があつて、而も此の第二の定義に従えば当然排却せらるべきものなるの事実に顧みるとき、特に然りである。例えば非物質的財産権の獲得等⁵⁾是れである。」また「経済原則」に則れる行為も直ちに「経済的」行為とはいひ得ない。何故なら「此の原則が……経済領域に於てのみならず、又他の凡ての人間生活の領域に於て、何ら特別な状態を前提とせず、苟くも合理的なる行為の方法が一般に語らるべき場合亦妥当する⁶⁾」ことが明白なことからである。最後に「生計手段の獲得に直接的関係を有する」行為が「経済的」であるとなすことも採用できない。何故なら「第一に『直接的』……という多義に失する概念を其の概念規定の標準としており、……第二に『生計手段』とは何ぞやに関しては之を確定すること不可能に属する⁷⁾」からである。

これを要するに「其の概念的基礎を欲望に有する所の『経済』及び『経済行為』の定義は、現実の生活における問題解決に際して甚大なる且つ根本的困難に遭遇せざるべからざること及び此の困難を克服するの殆んど不可能なること⁸⁾は」明らかである。

かくしてオーストリー学派的通説における概念構成の過程に対して生ずる根本的疑問は、「此の如く欲望でも、財でも、経済行為でも、其の概念

を定むるに当って、或種のものを排し他の種のものを採り来りて之が経済学上の正当なる概念なりという決定を与え得る所以の標準の何処にあるかということである。一を採りて他を排するには必ずその一を採り他を排する所以の根本原理がなければならぬ。吾人が混沌たる経験素材に対するとときに、一を経済的なりとし、他を非経済的なりとし、其の経験素材を両者に分ち得る為には、吾人の認識の原理として存在する或ものなくしては其の概念構成は任意たるを免れない。……非物質的欲望は美学・哲学・心理学・倫理学・宗教学等の直接研究すべき範囲にして独り物質的欲望こそ経済学の直接研究すべき対象なりとす、と突然に何等の前提なしに決定「することに対して」我等は『何故に』という問を発し得ないか。此の問に対して答うべき原理を有することなくんば純理経済学の概念構成は一個の偉大なる、乍併空中の樓閣たるを免れない。⁹⁾」要するに「従来の経済学は何故に或る種の欲望を「もって経済学の対象」となすかは説明し得ない。……現今の純理経済学は其の概念構成に於て単純なる前提なき独断論をなして居るものである。是偏へに純理経済学が心理主義を奉ずる結果である。¹⁰⁾」

それなら以上のような弱点を排除する方法如何。博士はその途を一般的に概念構成の過程の論理そのもののうちに求める。

概念構成は形式論理学に示される如き無雑作なものではなく、「異中の同をとり、いわゆる『抽象』によりて諸 *Merkmale* の普遍性を得、更に之を統一体に集成する」¹¹⁾過程には、求められている概念其自身が結局抽象以外の何らかの方法によって、既にアプリアリッシュに得られていなければならない。さらにまた「諸普遍的表徴を抽出するに要する比較客体の範囲決定せられ、即ち其の比較すべき客体に内存する諸表徴が共通なること既に決定せられ居るに非ざれば、一の概念も構成することを得ぬ。¹²⁾」すなわち概念には「対象に即して而かも対象から独立に存在を保ち得る」¹³⁾あるものの、「経験により経験と共に起るも経験より来らず之より独立せる *das Apriori*¹⁴⁾」が在って成立するのである。すなわち「一概念は数個の判断の集

和によりて成るとしても、如何に完全に集和しても到底説く事を得ざる概念の核心は終極に於て残ると云わねばならない。反対に此の核心あればこそ初めて幾多の判断は一概念に附属するものとして集和せらるるのである。此の概念の中心思想、諸判断を概念構成の部分として結合する核心其自身は決して此等諸 **Merkmale** 諸判断より導き出すことを得ない。¹⁵⁾

一般的に経済学上の概念構成においては「一を以て経済学に対して本質的なりとして之を採り、他を然らずとして之を棄つる所以の根本原理たる嚮導觀念 **die leitende Idee**……即ち何が経済学を学として可能ならしむる所以の斯学に特有なる概念の構成に於ける嚮導觀念なりやを見ることを要す。此の如き嚮導觀念は概念構成を導き、之をして経済学上可能ならしむるものなるが故に、其の概念構成其自身より発生し来るものではない。カント哲学上に解せられたる意義に於て之を換言すれば、此の如き觀念は概念構成に対して先天的ならざるべからず……〔即ち経済学〕の範囲内に於て其概念全部の構成に当り、一を其の概念に本質的なりとし、他を非本質的なりとするには、其の学全体を貫通して其の概念構成の帰趨を示す一嚮導觀念あることを要すとの意味に於て、其の学の概念構成に謂はば経験的な併し乍ら先天的要素を要すというのである。」¹⁶⁾

この嚮導觀念が把握されて始めて経済学の諸概念が出発点を与えられるのであり、欲望から出発して経済の概念を形成するに際してある種の欲望を経済的欲望となす瞬間に既に取捨選択の原理としての経済を前提として¹⁷⁾いることは明白であって、それは「概念構成に於て当さに得べきものを前提として居る一箇の循環論法の誤りに陥り、兼ねて概念構成上何故一を本質的なりとし他を然らずとするかを示すを得ずして独断論を称導しつつある」¹⁸⁾わけである。

かく先天的要素を確立して始めて「経済学認識の限界も価値も確然として定め得るに至るのみならず、之を定める規矩準繩をも併せて発見し得るに至るのである。而して此の諸根本問題は一にかかつて其の先天的要素の

妥当如何という唯だ一つの問題に集中するを得るに至る。此の如くして純理経済学は初めて其自身の正当な問題を発見し得たとい¹⁹⁾てよい。」これによって「認識をして対象に向わしむる経済学の概念構成上の心理主義的経験主義に代うるに、対象をして吾人の認識に向わしむる」ことが可能となり、「経済学上の総ての概念に *begriffliche Umwälzung* を起さしめ…従来²⁰⁾の純理経済学の概念構成上における實在論的循環論理的独断主義を破る」こととなる。

それなら、この概念構成上の中心的嚮導観念をどこから如何にして獲得するのか。またそれは経済学において如何なる本質的地位を占めるのか。この問題の解決は結局のところ夫々の特殊科学の動因、すなわちそれが如何なる認識目的をもって生成しているかを反省する以外にない。科学の対象・体系・方法は認識目的に照合しての合目的性に関してのみ判断さるべきである。博士はこれに関して次の如く述べている。

「概念構成の實際上の中心問題は其の学問の認識目的は何なりやということに帰する。或る一学を論理的に基礎附けすることは、その学が特有の認識目的を有することを論理的に明らかにすることである。……或一の学問……を論理的体系に於て立証せんとせば、其の学問が他の如何なる学問によっても未だかつて闡明せられたることなき、而して又他の如何なる学によっても闡明せらるることを得ぬ一定の認識目的あることを要する。一学問の興廃は此の認識目的の存否に²¹⁾係る」と。また述べている。「凡そ一個の学問が独立の存在を保存し得るのは、原則として其の学の客体其自身に制約せらるる為にあらずして、認識対象が吾々の認識に依り、而して吾々の認識に於て、統一的体系を保つにのみよるのである。従って同じ認識客体も其の認識目的の相違により相異なる学問の対象となり得るのである。故に或る客体が予定的に必ず一学の対象たり得とか又は反対に必ず他の学問の対象たり得ずというが如きことは断じてあり得ない。天地間の森羅万象が或は社会学の対象となり、或は経済学の対象となり、或は商業学の対象

となり……或は史学の対象となるは一に其の学の認識目的によりて、認識対象が吾々の特殊の思索体となり、統一的の体列に参するからである。²²⁾」

さて然らば斯く重要な意味を有する認識目的を把握することは現実的には如何にして可能であるか。それは博士によれば、当該科学が学問の分類のうちにおいてどこに帰属するかを知ることによって最も容易になし得ると考えられている。それなら経済学は学問体系において如何なる位置を占めるか。博士はこれに対しリッケルトの科学分類を前提として「経済学は自然科学に属するか、歴史科学に属するか、其の両者に共に属するか、或は其の両者の何れにも属しないか²³⁾」という形で問題を提起し、それに対して「経済学は断じて自然科学に属しない²⁴⁾」、「経済学の対象たる経済生活は本来歴史生活たる人生一般に対する吾人の一面的解釈によって構成されるのであり、したがって経済学は歴史に属す²⁵⁾」と述べている。そして「経済学には経済史以外に理論的部門があつて茲に因果法則は求められ、之を以て学問の要なり、学問の最終の目的なりとする²⁶⁾」論者よりの論難に対しては次の如く答えている。「抑々経済乃至経済生活という事は……一切の時処を離れて成立し得べき概念に非ずして、其の中心観念が irrational なる認識素材に制約せらるる処に初めて意義あるに至ることは明らかであつて、一般的に歴史を可能ならしむる論理に基くことは云う迄もないことである。此の意義に於て経済生活を対象とする経済学が歴史に属することは明らかであろう。此の認識目的に制約されたる上での認識対象たる経済生活が其表面に於てのみ *Generalseirung* の行はるることは可能なりと信ずる。其の成果は即ちメンガーの所謂 *Theoretische Nationalökonomie* と称するものである。……もしこの場合に経済学自身の認識目的を先天的内在的条件として、始めて人類の経済生活が吾人の認識に上り来ることを忘れて、時処に全く制約せらるることなき *genralisierende Begriff* に *aufgehen* せしめ、所謂『経済法則』なる者も自然法則なりとするならば、又実際論理上の自然法則が其処に求めらるるならば経済学は其の影を

潜め、その代りに一自然科学としての心理学のみが現われて来る。〔経済学は〕飽くまで一切の概念、一切の認識が経済学の認識目的に制約せられてあらねばならぬ。リッケルトが歴史と自然科学との中間範囲として生物学、経済学等を説く所は確かに此の重要な点を看過したものである。…
 … **das endgültige Erkenntnisziel** は必ず歴史、自然科学の何れか一にあらねばならぬ。……〔かくして〕経済学の学としての位置は明らかになった。²⁷⁾ 従ってまた認識目的も明らかになった。この認識目的に照らしてその対象を形成してゆくべきであり「対象其自身に於て一定の範疇を形成して対象と概念とが実在論的に結合せらるる」という関係が決して存せず、対象の側から見て或ものが必ず経済的なりとか然らずとかいうことはあり得ない。即ち同じ人も、行為も欲望も、同じ物も、組織も夫々の認識目的に係りて同時に而して同じ状態に於て、諸学の対象となって、夫々の異なる概念が形成せられ得る²⁸⁾」のである。発生的過程の追及によっては経済学的概念構成の帰趨に向って進み得る嚮導的理念は発見され得ない。かかる行き方は、認識論において排斥さるべきものとされている心理主義の経済学への適用、いわば「経済科学的心理主義」²⁹⁾とも称すべきものであり、「経済的」とは何ぞやを規定する能力なきものとして、経済学より排除すべきものである。

さて何が概念構成一般の嚮導観念であるかは根本問題であるが、この重要な中心観念は然らば如何なる構造をもつのであるか。

注 1) K. Soda, Geld und Wert, S. 154. 左右田喜一郎全集第Ⅱ巻, 391ページ。K. Soda. Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze, S. 62. 全集Ⅲ, 134ページ。

2) Die logische Natur, SS. 163-4., 全集Ⅲ, 136-7ページ。

3) K. Soda, Geld und Wert, 156-7ページ., 全集Ⅱ, 395-6ページ。

4) 左右田, 「カント認識論と純理経済学」全集Ⅲ, 274ページ。

5) Die logische Natur., SS. 62-3., 全集Ⅲ, 134-5ページ。

6) a. a. o., S. 64. 全集Ⅲ, 137ページ。

7) Geld und Wert, SS. 156-7. 全集Ⅲ, 395-6ページ。

- 8) Die logische Natur., S. 63. 全集Ⅲ, 135-6ページ。
- 9) 「カント認識論と純理経済学」, 全集Ⅲ, 275-6ページ。
- 10) 同上書, 278ページ。
- 11) 左右田「経済学認識論の若干問題」, 全集Ⅲ, 296ページ。
- 12) 同上書, 297-8ページ。
- 13) 同上書, 299ページ。
- 14) 同上書, 300ページ。
- 15) 同上書, 305ページ。
- 16) 「カント認識論と純理経済学」全集Ⅲ, 278-9ページ。
- 17) 同上書, 280-2ページ。
- 18) 同上書, 282-3ページ。
- 19) 同上書, 286ページ。
- 20) 同上書, 286-7ページ。
- 21) 「経済学認識論の若干問題」, 全集Ⅲ, 308ページ。
- 22) 同上書, 310ページ。
- 23) 同上書, 317-8ページ。
- 24) 同上書, 318ページ。
- 25) 同上書, 320-1ページ。
- 26) 同上書, 322ページ。
- 27) 同上書, 321-3ページ。
- 28) 「カント認識論と純理経済学」, 全集Ⅲ, 284-5ページ。
- 29) Die logische Nature., S. 76. 全集Ⅲ, 157ページ。

5. む す び

以上我々は経済学認識対象論の必然性, 経済学対象構成論, 左右田哲学における概念構成論の一端につき若干の考察を加えてきた。しかし左右田博士の概念構成論についてはなお中心観念の構造を始めとして省みなければならない論点が残っている。また左右田博士の所説については立ち入って吟味し批判を加えた上で対象構成論を論じなければならない。しかし紙数が尽きたのでこれらの問題については次稿で論ずることにしたい。